
青の鷺は空を羽ばたき

道化方 輪昌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青の鷲は空を羽ばたき

【Nコード】

N4448BA

【作者名】

道化方 輪昌

【あらすじ】

護衛の辞職を宣言した騎士団副団長。彼の後任として現れた年若い魔導師。端麗な容姿には似つかわしくない寡黙な性格の持ち主である娘は、王子の関心を知らず引き込んでゆく。逡巡と忠誠、娘の背後を取り巻く影。揺れ動く想いを見出すように、孤独な鳥はテルトウラの空を舞う。

恋愛要素は読む方の視点によって仄かにあったり、無かったりだと思われれます。

風変りな朝（前書き）

生温かい目でお読み頂けると有難いです。後書きに記載するべきことかもしれませんが、これからも見捨てないでお付き合ってください。と大喜びで飛び上がります。

どうぞ、ご照覧下さいませ。

風変りな朝

突然頭を下げられて言葉を失う。別に相手が自分の機嫌を損ねたとか、そういう単純な原因による謝罪でもない。現状を理解する以前に、事の発端と思しき節が全く見当たらないのだ。

彼が自分に仕えて幾年になるかの特に変化のない朝。主人を起こしにきた彼は、その任務を終えると同時に、額を膝につけんばかりの大袈裟な低頭をした。重い甲冑を装着し、尚且つ長く維持するのが難しい姿勢。近々身体に異常をきたさないか内心で心配する王子をよそに、近衛騎士は重い口調で主従関係の決裂を告白した。

「父が大病を患い田舎で養生せねばならない事態になったので・・・自分の勤めは今朝を限りとして頂きます」

「・・・うん？」

一体全体、どうしたことが起きたというのだ。彼の家庭事情を一切知らされていなかった王子にとって、この退任の意を把握することは少々時間を要するものだった。

近衛騎士は主人の思考回路が終着へ至るまで待たず、手にしていた退職願を目の前で広げた。男の無骨な指から流れたとは考え難い達筆な文字が連綿としている。

退職願には至極真つ当な事柄が記されてあるのだが、どうしてか彼の沈痛な叫びが胸の奥で木霊した気がする。この文書は主人に手渡すものらしく、彼の悲しげな気迫に圧された王子は思わず受け取ってしまった。

「殿下の傍でお仕えしたこの年月は決して忘れません。このような形で離職するのは非常に無念でなりません、詮方なきこと。貴方

様が栄華を継ぎ、より良き治世を成されること、心よりお祈りしております」

皺が増え、老いの目立つてきた古参の眉根が、くつと口惜しそうに寄る。重体の父を案じ、一刻も早く介抱をするべきなのにできないもどかしさと、主人を放って城を出ていく情けなさどが押し合っている表情だ。十九年間彼の世話になった身としては、どうにかして彼の個人的な事情を優先としてやりたい。けれど、それは王子の一存では困難なことだった。政治や直轄事業だけでなく、宮廷の人事等も国王と各大臣、及び元老院の決定と了承がなくては機能しない。

思考の道筋がそこへ行き届いて初めて王子は文面へ落としていた目をバツと上げ、大口を開け払う。頭と体の働きが一致せず、声帯は一向に音を紡ぎ出さない。

「あの・・・な？大体は理解したけど、僕に言ったところで何もできないぞ。父上とかに談判しないと。あとお前の引き継ぎの決定も」

「その点は予め片づいています。昨夕、正式にお暇をもらいましたので、貴方様にお別れを申し上げにきたのです」

用意がいい。残る手間は主人との辞別のみになるまで、前々から措置を講じていたとは。

ぼんやりと感心する王子の頭には、どうして一番早くに教えてくれなかったのだという疑問が沸かないようだ。寂しくなるなと呟く彼のどこに感銘を受けたのか、近衛騎士は口辺をわななかせた。年で涙腺でも緩んだのか。

しかるべき反応と問いかけをしているので、王子は眠りから脱出しているように見えるが、実は完全に覚醒し切っていない。つまり現下のやり取りは、彼の脳内では半分夢の出来事だと捉えられてい

るのだ。だから深刻に考える自己と、楽観視する自己とが心を二分して事態を見届けている。

そんな内面を露とも知らず、優しい言葉を寄越してくれる王子に涙ぐむ古参。心清らかなお方の傍を離れるなんて……とこちらも自分の世界へ爆走する。

やがて彼が一粒の塩辛い雫を落とし、辞去しても主は寝台に座ったまま。

とうとう王子が事の重大さに気づき、窓を全開にして古参の名を叫ぶがもう遅く　　近衛騎士の退城と王子の目覚めの間には一時間もの差があったのだ。

蒼は囁き

くすんだ心地と正反対に、快晴の陽が窓を伝って射し込む。振り上げば自分の髪の色が遙かな天空にも広がっていた。一面の蒼を時折孤立した鳥や群れが思い出したように滑翔する。

不覚にも太陽の強烈な光球が目飛び込み、反射的に瞼を下ろして顔を逸らす。俯き加減でうつすら瞳を開け、ぼんやりとしていた私の不注意を反省する。

膝の上の硬い感触で、ついさつき本を読み終えたのを思い出した。背表紙を閉じて、書棚の一か所だけ空いた不自然な隙間にしまう。それからは何の気なしに窓際の壁に寄り、ふうと息を零した。

書棚から窓のある壁へ移動するのが億劫だと感じるのは、このところ気分が沈んでいるのと、部屋が手広いせいだ。室内には両袖机と寝台と、書棚が幾つか。面積が広い分殺風景で、占有者が年頃の娘とは信じ難い飾り気のなさだ。でも、これで充分事足りている。もう一つ書棚を買い足そうかと考えている最中だけれど。

同時期に二つ名を賜って以来の好敵手であり親しき仲の若者から気紛れで贈られた首飾りを弄る。掌に乗せ、親指で上下に擦ると、小粒な真珠の輪がころころと転がった。先端に飾られた宝石はあえかな光を宿す珍しい水晶で、投光の加減によって内の碧あおが広がったり縮まつたりする。さながら月の満ち欠けを近くで眺めているよう。厳密に言えばこれは『月長石』という鉱物の仲間であって、水晶ではない。光り物を好む夕子ではないが、妙にこの装身具だけは身体の一部のように首から提ひきげていた。どうしてかこの微光を一目するだけで波立ちかけた心が安らぐのだ。

不意に扉の反対側を叩く音がした。誰だかはもう分かり切っている。お次は形式的にノックをするだけで、こちら側の事情などお構いなしに取っ手を回して開扉するのだ。姿勢を正して迎える気にも

ならず、壁に背を預けたまま肉桂石シナモンストーンの眼だけ動かした。起居を共にして云年の男へ目礼する為に。

元老院議員の頃と比べれば肉体の衰えを如実に語るようになった。白色交じりの髪が、予測通り一方的に入ってきた。

娘は男の機嫌が良好なのにいち早く気づいた。お前は物だと見下す目つきは珍しくにこやかで、真一文字に引き結んだ唇も滑稽なほどたわんでいるのだ。これほど分かりやすい異変はない。

同時に彼女は不穏な予感を肌で感じた。薙ぎ払ってもじわじわと這いつつてくる。掌の上で遊ぶ真珠の連なりが唯一の心の逃げ場所だった。

しかし男は懸念を募らせる娘を追い詰める。

「リオネ口の退役が正式に決まった」

悦を帯びた声質。

指の動きが止まり、真珠も窓から射す光をきつく反射して静止する。整った白晳の貌が男を見上げた。

とうとうこの日が来たか。唐突な発言にも心は驚かず、我が身を諦念するのみ。

男の大願が叶いかけてきた。こうなったら止まらない。

これまで歯止めをかけようと努力した。その度に膝を折らされた。きつと今回も。

「伯父上、やはりこの要件はどうしても……」

呑めません、と自分の置かれた境地がぐらついてても変わらず固辞する横顔を両手で挟んで強制的に目の角度を合わさせ、二石の肉桂石シナモンストーンの奥で照る抵抗勢力を食いつかんばかりに睨み射す。

さつきとは一変して出世欲にまみれた醜悪な形相だ。どんなに踏ん張っていようと、たちまち怯ませてしまう怒り。娘の最も苦手

な男の姿。

「恩を仇で返す気なのか」

呆れたものよと苛立ちを吐く。

「お前を一人前に育て上げた人間は誰だ。価値を見出した人間は！」

貴方の恩を買った覚えはありません。そう言い捨てたが、いかんせん、現在の衣食住は彼の懐からの支払いで賄われている。たとえ娘を理想像へ磨き立てる為の義務的資金だったとしても。孤影の身では生きていけなかっただろうから。

己の計画が反対されれば必ず、彼は彼女の負い目を突く。長年の経験で分熟知しているのだ。彼女が憐れみを誘うくらい実直な性格であることに。外には表さずとも、怒気を孕んだ彼の態度を畏怖していることに。

決着はついたも同然だった。

強要と拒否が衝突し、後者が早くにかち割れる。弱みを握られた立場の者は聞き入れるしかなかった。

「……仰せのままに」

男の口元に会心が再訪した。

両頬の拘束が解かれて自由になり、娘は押し下げられるように俯く。澄んだ瞳は何も映さず、整った顔立ちは情動を浮き出さない。

男が娘の真つ白い手を引いて大股に歩き出す。扉の外へ連れ出される前に一度だけ振り返り、遠い風景を一閃する鳥を認める。

何物にも強制されずのびのびと翼を広げ、窓硝子を横切る気ままな鳩。

あの自由の細片だに、自分は手に入れられないのだ。

突拍子な提案

朝食を終えた国王夫妻が謁見の間で来客と話し込んでいた時、少し浮いていた両開き扉が大きく開け放たれた。入室したのは金茶の髪青年。走ってきたせいで呼吸も荒く、着衣も乱れている。

壁に控えていた騎士達が慌てて彼の許へ集まって退出を願うが聞かず、王子は無骨な腕の群れを押し退けて国王と対峙した。

「父上！どういうことですか！僕に知らせもしないで！」

会議中に押しかけて中断させ、しかも何の脈絡なく怒鳴る王子に国王は嘆息し、王妃は眉を顰め、騎士達は呆れ果てた。周りに配慮せず我が道を走り抜ける次期国王陛下の将来が思いやられる。

彼の無遠慮な品行は宮廷の悩みの種で、国王夫妻もお手上げ状態の昨今だ。根は温顔なのだが、些か短所が目立つ。初めこそ王子の矯正を胸に立ちはだかった臣下達もとうに諦めた。こつてり面責してやると腕捲りしてもその場限りで、どことなく憎めない性格の王子を前にするとたちまち後ろめたくなるのだ。

選択した方策は『放置』というまずいもの。人々の反応を受けて更生してほしいと願っているのだが……。

鼻息荒く食ってかかる血気盛んな息子は、取り巻きの放つ冷ややかな空気をも省みない。睨み合うのに疲れてしまい、国王は肩を竦めて男の方へ首を回す。人差し指の先を息子に突きつけて。

「何を叫んでいるか分かるか？」

「ははあ……」

男は顎に手をやって思索に耽る素振りをする。怪しげに口角を上げ、「リオネ口の件では……」と低く呟いた。国王もようやく合

点がいき、先刻とは打って変わった穏やかな物腰で息子へ語りかけた。

「やっと後任が決まったからお前にも報告しようと思ったのだが、あやつのは行動が早かったか」

近衛騎士の言葉通り、周知の決議だったらしい。実家の都合で、元近衛はかねがね辞職を願っていた。されども王子は彼に懐いており、その上彼の言うことには比較的従順だった。今後似たような

諸々の意味で有能な

代役が出てくるとも限らない。

探し出すまで待つてくれと再三頼み、やっと昨夕、正式な退職手続きを済ませたのだ。この話し合いが終わってから息子を呼び、ゆっくり説明しようと予定していたのだが、どうやら手間が省けた。良くも悪くも、親を想う気持ちは子に迅速な行動力をもたらすようである。

「お前には悪いことをしたな。リオネロの父親の具合が悪いことは前々から分かっていたのだが、奴の後任がなかなか見つからなくてだな・・・ 無理を言っただけで今日まで引き延ばしていたのだ」

早いうちからこの青年に告げるのは、悲しむ時間を増やすだけだと敢えて秘密にしていた。現時点は平生と相も変わらぬ動静なので、いらぬ気遣いだったかとも考え直させられるが。

しかしリオネロもリオネロだ。国王夫妻や宮廷官人には暇を請わず早々に出ていくとは。よほど父を心配していたと見える。近日中に容態を聞いて、芳しくなさそうであれば宮廷医師を派遣しようとするか。

一旦唇を引き結び、沈思し始めた国王に代わって、来客である元老院主席のアウグストが決定事項の詳細をつまびらかにする。

「そこですが。私が案を出しまして」

「案？」

「ええ。私の姪なのですが」

聞けば、彼の姪という情報だけで会議の席は満場一致だったという。これはアウグストの親類縁者だからという不適當な理屈ではなく、彼女の背負う肩書に必然性があつた。そのおかげで宮廷魔導師が積極的に支持し、本人の了承を得るという形で落ち着いたのだ。

テルトウラのみならず、彼らの住まう世界には人間離れした靈妙な力を有し、それを巧みに扱う『魔導師』と称される稀世の存在が異彩を放っている。彼らは生まれつき　　おおよそ共通して瞳

に　　空に似た色を宿し、彩度と蒼の面積に応じて生来の実力が決まる。伝えられたところを信ずるなら、まだ見ぬ姪は早咲きの大器である。

何でも、帝国随一の特別教育機関である施設、スドウヤウセイガクイン 斯道養成学院を九歳という異例の若年で課程を修了したと専らの噂だ。そして二年後、テルトウラ全土に存する魔導師の頂点に君臨する『大師』の次代候補者の地位についた。その折から歩く伝説となり、今や魔導師達が憧憬を傾ける重鎮の一人である。

そんなお高くとまっていそうな異性とうまくつき合えようか。お互い、かなり持て余す予感がする。

「殿下と年が近いので、話し相手にもなるかと」

異性である時点で無理な気が沸々と湧く。王子がその娘に無体を働く恐れは考慮に入れていないらしい。する気はさらさらないけれど。

いかなる有力な話でも、語り手がこいつだったら全て胡散臭く聞こえる。頭は切れるが野心が大きく、ともすれば王族も道具としそくなきらいがある。どうにか辞職させたいのだが、有能故に手離せ

ないのが実情だ。もしかすれば姪も類似した頭をしているのだろうか。だとしたら相当嫌だ。お守りなんていららない。

大体近衛がいなくとも、城内警備を任された騎士で事足りるくらい宮廷は平穩だ。国内の情勢にも目立った波風は立っていない。王太子である彼が暗殺される公算も低い。それでも近衛、近衛、と連呼するのは、ひとえに彼が向こう見ずな人柄だからである。

こんなことになるなら、品行もちゃんと正しておくべきだった。過去の自分を回想すればするほど、恨みが湧き上がる。

苦々しく眉根を寄せ、静まり返る未来の主君に戸惑いを覚えた騎士達の中でどよめきが漏れる。微かなさざめきは波紋となって国王と王妃の意識をも王子へ投じさせた。いつにない気がかりを抱く青年に皆不審そうな面持ちになる。唯一、雪の積もり始めた褐色の髪を後ろに撫でつけた来客を除いて。

王子の予習

元老院に置いてきた件の娘をお連れ致します。

胡散を撒き散らす紳士は一礼して勤め先へ戻っていった。自慢の姪を紹介したくてたまらないと訴えかける、粗雑な仕草だった。

奴が二度目の登城をするまで時間がかかる。その空きを利用して、図書室の司書を務めるモリッツを呼び寄せた。魔導師と魔術に関して、暇潰しがてら学ぶ為に。

類稀な強さではないが、モリッツも魔導師の一員だ。アウグストの姪を真つ先に指示した男でもある。ということは、かなり確信ある知識でもって賛同したのだ。そのうちの小片でも構わないからとにかく喋れと命じれば、堰を切ったように彼は滔々と長広舌を振り出した。

魔導師の世界

斯界しかいは押し並べて男の率が高い。女は一握りにも満たない数だ。紅一点と捉えてもいい。

稀少ゆえの特質か、女魔導師との間に生まれた子は母親と同程度の魔力を有する。

本来魔術の素質は遺伝しない。けれど母体であれば、へその緒を通じて直接受け継がれるのだ。男魔導師もまことに得難い人的資源だが、女性も極めて尊ばれる。魔力持ちの平民の女兒を、大貴族が養子に貰い受けた事例もある。義理の娘が子孫を生み、それが女であれば実家はどんどん栄えていくのだ。残念ながらこの養女は息子しか残さなかったようだが。

魔術は国家が重宝する戦力かつ防衛力で、またそれを自在に扱うには、魔術の仕組みを呑み込む幅広い知性と豊かな感性が必要であり、これは一般社会にも通用する。戦いに臨みたくなければ柔軟な

頭脳を活かした職に就く。肉体労働に行こうと知的労働に行こうと、生まれ持った稟性を最大限に利用できる魔導師達は、必然に貴族と肩を並べる順境にありつけるのだ。それが女性魔導師ともなれば凄まじい限りである。男所帯の斯界でも、魔力持ちの女性は需要がある。

「なんで男が多いんだ？」

「魔術を見出した最初の人物が男だったからです。適性があったのでしょね」

司書の答えは案外素っ気ないもので、王子は拍子抜けした。

「太古に女兒の出生率が極めて低い時代があったそうです。それでなかなか子供が増えず、この国は滅亡しかけました」

亡国を憂える民の一人が、男だけでも子をなせるような術を創出しようとして模索した。具体的な過程は記録に残っていないが、どうあれ男は魔力と魔術を発見したのである。自然の摂理に反するものだとただちに禁止された魔術を、往年の人は国の長命を希って使い続けた。道理に適わぬ説だが、結果として現在の自分達がテルトゥラの大地を踏み締めている。

核心部分を擦り抜けて説話は続く。一躍賢者と崇められた男は当代の無知な国王を退け、民の後押しもあつて新王となった。男女の出生率がほぼ均一化した時期を見計らつて、自ら幼児創成の厳禁を定めたという。新王の死後、彼の体内で脈打っていた甚大な魔力が大気中に分散し、二代目の宿主に次々と降りかかった為に、一人から複数へ拡大していった。

男の家名はレーヴライン。つまりテルトゥラ第一王子の祖先にあたる。男魔導師の魔力は代々受け継がれることがないので、現代までの歴史を遡っても魔導師の王家は誰一人としていない。

魔力の蒼は突然変異的に発現するものなので、どこの誰の子供が器となるかは予測不可能だ。そして天から最低限の資質^{魔力}を賜ったとしても、力不足や上手く制御する器用さがなければ、他の道へ降りることを余儀なくされる者は大勢いる。いくら魔力が備わっているからといって、必ずしも将来を約束されるわけではない。国家試験や騎士団による入団試験と同じように、一定の水準を超えることが必須要項である。これが難関だけに夢に描いた未来図を握り潰す者が多い。

奴の姪は狭き門を易々とくぐった。そうして聖堂に認められ、国内の魔導師を束ねる最高位・大師の後継候補者にも選ばれた。モリツツら魔導師の憧れの的だ。

「アラン。お前も今年で十九。しゃんと構えて大人びた行動を心がけるのですよ。エルバ学院院长が言うには、その人は六歳で入学した時から落ち着いた物腰だったのですって。派手にしては笑われてしまいますわよ」

国王と傍で静かに教師と生徒の会話を聞いていた王妃が穏やかに口を挟んできた。小さな子供に言い聞かせるような言葉遣いが王子の神経を逆撫でし、ぷいと旋毛を曲げさせた。

斯道養成学院在勤のエルバは、かれこれ三十年以上も学院長の仕事を続けている。一方で、教場の花一輪であった彼女に何くれとなく面倒をみていた実年の魔導師だ。考えようによつては娘の恩師である彼が、こよなく可愛がっていた教え子を忘れる筈がない。

彼女のことを気になった王妃は、密かに学院院长とやり取りしていたようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4448ba/>

青の鷺は空を羽ばたき

2012年1月14日13時48分発行